

中ソ同盟条約時代へ進展
壁だった毛沢東体制なくなる
国際共産主義運動も再編成へ

東京外国語大学教授

中 嶋 嶺 雄

本日のテーマは「新段階の中ソ関係」ということですが、私自身
は中ソ和解というものが、今後の八〇年代の大きな焦点になるば
かりでなく、和解のテンポもさることながら、質的側面においては、
ひょっとすると、五〇年代の中ソ同盟という状況になっていくの
ではないかということを感じているわけです。

数年前から中ソ対立という深刻な側面を強調する半面、中ソ関係
には常に復元力が働くこと、とくに中国内政の変化によって、将来
中ソ関係に大きな転換があり得ることを、常々申しあげてきたわ
けです。

しかしながら、私の立場は一貫して少数派でしたし、今日でも中
ソ和解は大したことはない。せいぜい中国がいわゆるソ連カードを
使って、アメリカ、日本からいろいろな利益を引き出すための外交
的、戦術的な手段にすぎないという見方が、大方を占めていると思
います。これはわが国だけでなく、私もつい先週、アメリカのハー
バード大学での中国セミナーに出席して帰国したばかりですが、ア
メリカでも、多くの専門家は中ソ和解の進展については、どちらか
というとな否定的であって、私のような見方をとっている人はごく少
数です。

アレン・ホワイティングという有名な研究者が比較的私に近いぐ
らいです。それは同時に、中ソが和解してもらっては困る、という一
種のアメリカの期待があるからです。

訪中の鈴木前首相が、恐る恐る「中ソはまだ和解しないでし
ょうね」と尋ねたところ、中国側は「まだその時期ではございませ
ん」と体よくかわしたわけです。

その舌の根の乾かないうちに、中国はこの秋に中ソ次官級会談を
開き、さらには中ソ首脳会談へと引き継がれるわけです。その過程
で異例の中ソ外相会談が開かれたのも、ご承知のとおりです。

日中友好に大きな判断の誤り イデオロギーは捨て去れない

過去十年ぐらいをさかのぼらなければなりません。中国という
ものを外部世界が操作出来るという考え方——これは基本的にアメ
リカの政策がそうであり、わが国もそういう立場に立っている。そ
して、中国に経済的利益を供与することによって、中国を西側諸国
につなぎ止めておくことが出来るという中国に対するわが国の分析
あるいは日中外交そのものにも、私はかねがね、かなり大きな違和
感と抵抗感を持ってきたわけです。

ところが、わが国の防衛白書をみても明らかのように、中ソが今
後とも対立することを前提に、日本の外交政策や防衛政策が決まっ
ているわけです。

果たしてそうであろうか。かつて長い間、一九五〇年代には中ソ
の一枚岩的団結という神話がありました。この神話が非常に広範に
普及していたわけで、よもや中ソの対立などとはあり得ないという
が、多くの人たちの見方であった。

それが音をたてて崩壊した後に、どうも私どもは一般に、こんど
はあれほど中ソの対立が激しかった故に、中ソ対立は永遠に続くで

あろうという新しい神話に、いつの間にか支配されているのではないか。そして、ある種の安心感、つまり、中ソが対立していてくれれば、日本は助かる、あるいは西側諸国は安泰だという安心感なり期待に裏打ちされて、永遠の中ソ対立という神話が支配してきたような気がします。

そして、一方では日中友好関係が非常に強化され、名古屋の皆様方も貢献されました。それ自体として、非常に高く評価されるべきだと思いますが、中国は社会主義国であるよりは、いわば、中国は中国なんだ——という感じ。日中関係は本質的には、こんなに距離が近いのにかかわらず、社会システム、国家目標がまったく根本的に異なっているわけです。

その日中のいわば相互共存ということよりも、一步を踏み越えてソ連と対決するためには、中国と手を組むべきだという前提が、わが国の外交政策なり、安全保障政策を支配してきたと思うのです。

少なくとも、日中平和友好条約が覇権条項という、優れて戦略的色彩の強い条項を導入して結ばれたことを思うと、このことはまぎれもない事実といえるわけです。

ところが、そこに大きな判断の誤りがなかったか。つまり、中国が永遠に西側に連帯し、やがて中国自身も社会主義体制を離脱していくのだということが明らかであれば、この選択は正しかったと思います。

しかしながら、権力を確立した共産党政権というものが、そう簡単に自らの原則なり、イデオロギーというものを捨て去るものではないということを、私どもは軽視してきたのではないか。確かに社会主義はどこまでいっていい。そして中国も経済がこんなに遅れている。大したことはないという一種の安心感があった。

しばしば日本人は、中国に行きますと、あるいは中国について考える時に、なんといっても数千年来の歴史的なつながりの中で、中

国文明のもたらす圧倒的影響力にとらわれる。例えば北京に行く。そして万里の長城に登ってみると、非常にスケールの大きい中国の歴史的遺産と文物がある。そのことに感激しない日本人はいない。しかし考えてみると、これは二千年以上も前の歴史的遺物であって、今日の中国の国家の体質なり、社会の仕組みなりというものは、まったく違うんだということをつい忘却してしまふ。そこに一つの盲点があったのではないかと思うのです。

一人当たりGNPは四〇対一 日本の歯車と合うはずがない

そこで、こうした前提のもとで考えると、どうも昨年の夏の教科書問題にはつきり現れていたように、日中友好は日本側から中国をみる時の姿勢であるが、果たして中国はそれほど、いつも日中友好を必要としているかどうかという疑問が、わいてきたのではないか。私どもは中国やソ連、北朝鮮のような日本と相対している東アジアの共産主義国、社会主義国をみる場合に、相手がどうなっているかを気にするわけですが、翻って、相手から日本がどう映るかは、あまり考えたことがない。わが国の今日の経済的な繁栄はアジアの社会主義国に比べれば、まさに、ものすごい衝撃として映っているということについて、われわれの自覚は薄いような気がします。つまり、中国や北朝鮮、ソ連から見ると、日本は、いらだたしい存在として、そこにあるということをわれわれは、しばしば忘れているのではないか。

そのいらだちが教科書問題となり、中国自身、いろんな教訓をこの間に学んだと思うのです。一時は日中の二祝儀外交というか、一種のお祝い気分の中で、日本に学べというわけで、日本に一斉に視察団が来た。

しかし鄧小平が日本へ来て、新幹線に乗り、頭が痛くなったとい

う言葉が如実に示しているように、日本と中国は、経済的にみると一人当たりG N Pは四〇対一で、日本は四十倍も豊かである。今後、格差は広がりこそすれ、縮まることのない隔たりです。

日本に学べという日本企業の管理のシステムとか、市場経済のマーケットメカニズムとかを一時導入することがあるといったが、これは結局根本が違うわけですから、うまくいくはずがない。それは同時に一九七八年のたかだか四年半前の日中ブームの時に、日本の財界の方々が、これからの中国は現代化だといって、それ行け中国と期待がふくらんだわけです。

しかし宝山製鉄所の問題をみても明らかのように、ついこの間の全国人民代表大会で第二期工事はやらないという方向になってきているわけです。中国側からしても、日中関係というものに限界があることに気がついてくる。それはどだい無理なんですね。

わが国の先端技術はますます進んでおりますし、いくら不況とはいえ国際的比較の中では、わが国自身はまだ活力を持っております。

ところが、中国は四つの近代化が非常にうまくいったところで、今後、二十年間かけて、日本の十分の一の成長を遂げるということです。それも一人当たりG N Pを今世紀末までに千ドルにすればいい。日本は間もなく一万ドル。世界のG N Pの一〇％は日本だけで占めている。

中国のスローテンポの成長からすると、日本との経済関係は歯車が含まない。中国には中国の時間が、ゆったり流れているわけです。そこへもってきて、日本のカチカチ刻み込むような時間を一緒にしたのですから、そこに破綻がくるのは当然です。

これ以上日本に接近すれば、中国社会自体が歪んでしまう、と中国が最近考え始めているのは当然である。ですから鄧小平が新幹線に乗って頭が痛くなるというのは、まさにそういうことなのであつて、それに気がつき始めますと、中国自体、これまでの価値観、世

界観、世界戦略に対する見直しが起こってくる。

よくこういう議論がある。中ソが和解し、ソ連が中国に接近したところで、ソ連は経済的にはガタガタだし、中国にとってメリットはないではないか。それよりも西側諸国を向いて日本、アメリカから技術を導入した方がいいのではないか。だから中ソは和解しない。これは、西側諸国の物差しで見ている判断ですね。われわれの物差しで測ればそうなのですが、中国は冗長な時間の中で、しかも物すく能力や効率が悪い。そういうスローテンポの成長をするには、むしろ社会主義のソ連の方が遙かにピッタリしている。ふさわしいという評価が最近出ているわけです。

こうした状況があるということを、念頭に置いていただきたい。それから私は、このお話をする場合、中ソ和解という定義を明確にしておかないといけないと思うのですね。

どこまでが中ソ和解か、どこまで中ソ同盟か、いろいろな定義が可能だから、将来展望については、われわれの立論の基礎をはっきりさせていかねばならない。そこで申しあげたいのは、私が中ソ同盟もあり得るというのは、まさに今後の社会主義が様々の問題に苦しみながら、従来のように対立などしておられない状況がきつ々ある今日、中ソはともに共通の利益を求めて、いわば最後のあがきをせざるを得ないという一つの前提があるからです。

そうした中で、中ソはともに日本の安全保障の問題とか、防衛力の問題など日本の外交、防衛の根幹に触れる問題で、同じ立場に立ってくるとはいいか。こういうことが中ソ和解、中ソ同盟としてわれわれが考えるべき当面の事柄ですね。

私自身は、著書『中ソ対立と現代』の中での私の主張でも明らかに、中ソ関係を歴史的に分析して、ロシア民族と漢民族が、そう簡単にうまくいくものではないことを強調することにおいては、人後に落ちないつもりです。

けれども、当面、われわれが考えるべき問題は、そうではなくて、今後日本の外交、防衛とか、あるいは日米関係に対して中国やソ連がともに同じ発言をしていく。それがまさに中ソ同盟であり、中ソ和解の今日的意義ですね。

日本に学べから批判に変わる 赤い貴族の独裁体制強化さる

昨年の教科書問題で明らかになっていたように、中国の強い日本軍国主義批判。そして、日米安保体制に対する中国の批判。かつての友好時代には、中国はどうだったでしょうか。日本は大いに防衛力を増強して下さい、自衛隊も、もっと強化されるべきである、覇権主義に対決しましょうというのが、中国の毛沢東、周恩来時代の主張だったわけです。

ところが、最近ではすっかりトーンが変わっています。

中曽根訪韓は、いろいろな議論があるかもしれませんが、少なくとも中曽根新内閣が、第一の外交的着手として、日韓関係という日本にとって最も近い国際関係でありながら、常に摩擦、緊張の多い国際関係を修復したことは間違いないわけです。

それを基礎に訪米しているわけですが、中国は新華社や外務省のスポークスマンが、早くも中曽根訪韓の真意を敏感に感じとって、これは南北朝鮮の固定化につながり、そして日韓の癒着、さらにはアジアの平和安定のために、好ましからざることだという批判を投げかけているのです。

同じことをソ連もいっている。さらに中曽根訪米の前に明らかになったアメリカへの先端技術の供与の問題についても、中国は従来は大いに結構だといっていた。アメリカとも軍事協力しよう、日本とも軍事情報を交換しよう、そしてソ連と対決しようといっていた中国が、これに対して警戒的シグナルを早くもあげている。

中曽根総理が帰る時、アメリカ側とどういうコミットメントを取りつけてくるか。まさに、注目していかねばならぬところだ。少なくとも従来は総理大臣と違うある種の覚悟を持ってアメリカに行っているだけに、当面の西側陣営の結束のために、その要である日米関係を修復するためにわが国の防衛、安全保障の根本にかかわる問題について、コミットメントがあるのはいうまでもないと思うのです。

そうした時に、中国は日中友好のために、あるいは米中接近のためにソ連と対決するのは、大いに結構であるというのでしょうか。最近の中国の発言をみると、とてもそんなことをいう雰囲気ではなくなっていますね。

こういうことが、まさに中ソ和解の現段階の意味だと申さざるを得ないのです。

以上のような前提を踏まえ、本論に入っていきたいと思います。中ソ和解が進みつつあるかということに関しては、中ソ対立をもたらした根本は何であつたかということ、考えてみなければならぬ。

中ソ対立をもたらした根本は、結局は、中国に毛沢東という類まれな個性的なリーダーが出てきて、あの北方の巨人（ソ連）とは絶対と一緒にやれないといひ張つたことですね。私の仮説に従えば、中国に毛沢東時代が続いていたとすれば、あるいは華国鋒のように毛沢東の後継体制が大きな力を占めていたならば、絶対中ソ和解はあり得ない。

ところが、いまや中国の内政の方向は根本的に変わったといひいい。これは従来から、私が申しあげてきたことだが、今後の中国は様々の問題を持ち、鄧小平体制も不安定にもかかわらず、今日の中国は徐々にいわば官僚的独裁体制を固めつつある。

はやりの言葉でいえば、赤い貴族の独裁体制が、このところ著し

毛沢東



鄧小平



胡耀邦



く強化されているといわざるを得ない。そして、鄧小平体制は社会的にもたくさんの問題をもっているにもかかわらず、それを覆すだけの勢力が、いまの中国にあるであろうか。私はないと思う。もう一度あの文化大革命の旗じるしを掲げたり、毛沢東政治をよしとするような潮流が生まれるであろうか。これもないと思います。

中国は最早、二度と戻れない地点を踏み越えた。そういう意味で、大きな転換をしているのです。ただ、この転換は一部の日本人が期待したように、西側諸国や日本に徐々に向いてきて、そして中国がなし崩し的に資本主義社会の方向に内部から変わっていくと考えるのは、私は甘い幻想だと思えます。

長期的なことを語るならば、中国社会は果たしてマルクス、レーニン主義にふさわしい社会かということになると大きな疑問を持ちます。

恐らく、社会主義、共産主義そのものについても、二十一世紀ぐらいになると、やがて、マルクス主義は十九世紀の思想であった。そして二十世紀の国民国家レベルの実験を経て、結局はうまくいかなかったのだ、と一つの過去の歴史のものとして、語られるかもしれない。現に成熟した社会主義から、徐々に離脱する動きが進んでいる。

あのポーランドやチェコスロバキアをみていただきたい。すべて

社会主義が成熟すればするほど、そこから離脱しようとするトレンド（傾向）が、まさに時計の針が逆に回っていくように、今後の一つの世界史の潮流になっていくでしょう。私はそのことについて、かなりの確信を持っている。

しかし、いま中国の共産党体制が、なし崩し的に崩れると期待するのは、あまりにも時期尚早である。むしろ最近の中国をみていると、昨年九月の第十二回党大会は鄧小平にとって、満足のいく党大会だったと思います。一部には、この大会は鄧小平には非常に不満であって、鄧小平体制の抵抗が非常に強い。葉劍英や李先念のような長老も、そのまま残ったではないか。あるいは華国鋒の名前も残ったではないかといわれますが、私はそういう見方ではなくて、鄧小平にとっては満足のいく大会だったとみている。

鄧小平の使命観は非毛沢東化 胡体制は中ソ友好時代の人で

鄧小平という人は、非常にしたたかな人材ですから、そう簡単にやめたとはいわない。彼はそもそも一九七七年に復活した時に、あと八年から十年は自分の五体はとも悪くないといったわけです。鄧小平という人は時間を政治に導入できる希有の政治家です。

毛沢東の場合は、自分の生命、生涯が徐々に成熟段階に入っている時に、政治のスケジュールと自分の持っている時間との案配が出来なかった人です。ですから晩年になって、結局「悲劇の皇帝」になっていった。

これに対して鄧小平は時間、チャンスは絶対失うべきではない。「時に再来なし」という言葉を座右の銘にしているだけあって、彼が時間について発言することは、すべて戦略的なものを持っているわけです。そうしますと七七年に復活した時に、八年から十年といった鄧小平は一九八五―八七年まで、つまりあと三年から五年は自

分がまだ中国をみていくんだという使命観に支えられて、今日の政治をやっている。

そうするとこの第十二回党大会は鄧小平の使命観を支えるための一つの重要な一里塚であっても、決してゴールではないのです。鄧小平の使命観は、中国全体の非毛沢東化だと思います。

そのことを着々とやり始めている。しいていえば、毛沢東の世界戦略の根本的転換という問題も、そこに入るのではないか。それは当然、中ソの和解ということが、さらに促進されることも含まれると思うのです。

こうして鄧小平は一九七八年の三中全会以降、徐々に国内体制を固めてきた。そして一昨年六月、六中全会で歴史問題に関する決議が採択されて、文書の上で毛沢東を否定し、華国鋒を主席の座から引きずり下ろし、非毛沢東化を公式的に党中央で認めさせ、同時に「五〇年代はよかった。あの五〇年代にはソ連の援助があった」という文書を公式に採択させたわけです。

そして、昨年の第十二回党大会では、党規約を改正して、従来の政治局中心の党の組織体制を、書記局中心のものに固めました。

従来の中国共産党は主席が最高権力者でしたが、今日では書記局のチーフが最高権力者になっている。そしてそこに胡耀邦という鄧小平にとって、最も信頼が出来るエースを据えたわけです。胡耀邦は鄧小平が長い間党の総書記であった時に、その外郭団体である共産主義青年団の第一書記であった時代から、まさに鄧小平にとってエースだった人です。

中国共産党は政治局には葉劍英も李先念も残っている。これらの人を追放、あるいは引退に持ち込むことは十分に出来るにもかかわらず、彼らにはそのまま座っていたのだ。そして、政治局を象徴的（シンボリック）なものにして、実際には、書記局を中心に党の機構を全面的に機能強化したのが、現在の中国共産党です。

書記局には共産主義青年団の出身者がずらりと並んでいる。かつて中国では毛沢東時代は長征に参加したかどうか、出世の一つの指標でした。今日、時は移り、いまの胡耀邦体制では、五〇年代の中ソ友好時代に、共産主義青年団のリーダーであったかどうか、一つのエリートコースになっているわけです。

同時に、この書記局には劉少奇、鄧小平時代には、考えられなかったような実権派の中でも最も黒い、最も悪い人たちといわれた幹部を復活させて、全部並べている。

ですから、いまの中国共産党のリーダーシップの性格は、鄧小平とか胡耀邦とか、従来の毛沢東型のカリスマ的支配ではなくて、非常に官僚的統制、つまり、党の幹部としての組織的なリーダーシップのもとにやっていくような、赤い貴族の独裁体制の人たちで固めているわけです。

これはなかなか強いと思うのです。カリスマ的支配の場合には、非常にエモーショナルな心情的共感のもとに指導者はいるわけですが、そのかわり、政治的、組織的に強力ではないわけで、今日のような鄧小平型のリーダーシップは、その点で強いといっているでしょう。

そして、中国共産党の体質はソ連に似てきました。モスクワにおいては、アンドロポフが今回の後継者争いの中で、ひと足先に地位を固めたのは、昨年の五月に、書記局に復帰していたということです。この時に、既に後継者として決まっていたとみていいわけで、政治局員であるより、書記局員であることの方が遙かに重要です。

政治局員はウクライナ出身なら、いつもウクライナにいるわけですが、ところが書記局員は常にモスクワにいて、日常の党の業務を司り、政策決定を行っている。

そういう意味で中国共産党も総書記胡耀邦の下に、そういう体制

が出来て参りました。ですから、鄧小平、胡耀邦のようにラインに
いる人は、大事なお客さんがくるといつも随行するわけですね。こ
の九月には、金日成が突如中国を訪れてびっくりさせた。鄧小平の
故郷の四川省まで、あの忙しい日程の鄧小平、胡耀邦が金日成に
びたり寄り添って、汽車で旅をする。金日成が今日の時点では大
切なお客様であることがよくわかります。

党員の半分は文革時代の入党 行革も根こそぎのつくり変え

金日成訪中の後、鈴木前総理が中国を訪れました。中国はど
う対応をとったであろうか。

わが国は中国に対して経済的には最も貢献している。円借款も有
利な形で供与し、経済的には官民合わせて総額六〇億米ドルになん
んとするような枠を、中国のための経済援助に設定しているんで
す。そして日中平和条約をむしろ中国がいう値段でもって結んだ唯
一の相手国です。

にもかかわらず鄧小平、胡耀邦らは、ご祝儀で顔を出し、あとは
趙紫陽に任せてしまった。私のみるところ、中国のリーダーシップ
の中で、趙紫陽首相は本当のラインじゃない。

新聞を見ますと、鄧小平、胡耀邦、趙紫陽と書くわけですが、そ
もそも文革の末期には鄧小平を批判したこともありますし、もとも
と鄧小平のラインではない。彼は日本に來たり、アフリカに行った
り、中国にとつても、政治的に非常に大事な時期にいわば中国の国
家の顔として、よくご祝儀外交をやって歩いているが、本当に重要
な人は北京にいるわけですね。

ですから、その点でも、わが国の場合、昨年教科書問題でさんざ
ん叩かれたものですから、とにかく謝ってくるのだということを経
本前総理は考えていたのだから、中国にとってこんな楽な相手はな

い。

その結果、もしも今後日本がアメリカからの防衛力増強要請に少しでもこたえようとすれば、いつでも中国は日本を軍国主義と批判出来るという権利を中国側に与えて、鈴木さんは帰ってきた。これは今後の日本外交の選択を非常に拘束したといわざるを得ない。

こういう状況を考えてみると、中国側もなかなかやるなあという気がするのですが、昨年の九月のことを少しお話しします。九月は中国にとっても、非常にこういう問題を考えるにいいケーススタディの一カ月でした。鈴木さんと相前後して、サッチャー首相が中国に行った。

サッチャー首相はどうでしょう。香港の将来にからんで、いま中国とイギリスの関係はある種の緊張を含んでいるけれども、阿片戦争の後に結ばれた不平等条約である南京条約、北京条約。その後の香港の九竜半島の一部の九竜地域拡張条約という、植民地時代の一世以上の過去の遺物である条約を、今日の時点でも国際法的に有効だといひ張ってきたのです。これはなかなかいい度胸だと思います。

そうであるだけに、サッチャー女史には鄧小平、胡耀邦という大事な人がいつも出てきて、ずうっと付きそってやっていたわけです。もう一人、昨年九月には大事なお客さんが中国に来ました。フランス共産党のマルシェ書記長です。なぜフランス共産党の書記長が中国にとって大事であったか。いうまでもなくフランス共産党は、まぎれもないソ連派共産党です。ユーロ・コミュニズム（西欧共産主義）の中でも、フランス共産党はまさにアフガニスタン問題やポーランド問題で、常にソ連の立場を支持してきた。

そのフランス共産党と中国共産党はマルシェ訪中によって、歴史的な和解を遂げた。この時にも鄧小平、胡耀邦の二人は全日程随行し、そして、過去の方針は毛沢東時代の誤りであった。あれは毛沢

束のやったことで、自分の意見を、相手が聞かない時に、相手を修正主義とか帝国主義の手先とかいう呼び方をしたのは、誤りだったといっているわけです。

私の仮説からいくと、やがて中ソ和解は当然、国際共産主義運動の再編ということをもたらすわけで、日本共産党と中国共産党との和解も、時間の問題になりつつあるのが現状だといっているでしょう。中国共産党も、最近では宮本修正主義とか、四つの敵といわなくなったばかりか、日本共産党の不破哲三氏とか上田耕一郎氏の著作を中国の出版社が翻訳出版し始めている。

そういう形で赤い貴族の独裁体制が評価されていることを、念頭に置いていただきたい。そして、鄧小平、胡耀邦、書記局の要である万里という人は、皆五〇年代の中ソ友好時代、あるいは少なくともソ連の空気をかなり吸ってきている人たちです。鄧小平もモスク

中嶋 嶺雄



昭和十一年五月十一日長野県松本市生まれ。三十五年東京外国語大学中国科卒業し、四十年東京大学大学院修了する。四十一年四月から東京外大外国語学部助手となり、講師、助教授を経て、五十二年教授となる。専攻は国際関係論、現代中国学。おもな著書には「現代中国論」「中ソ対立と現代」「新冷戦の時代」「北京烈烈」があり五十七年から中日新聞で「論壇時評」を執筆、好評。

講師の紹介

ワに留学していた。もう一人、書記局に胡啓立という人物がいます。いまの体制が続くと、将来中国を担う一人になると思いますので、記憶しておいていいと思います。

なぜ私がこの人物に注目するか。彼だけが五十三歳という若さのためもありますが、かつて中国全学連の委員長として、あの五〇年代、ちょうど日本では砂川から安保にいたる時期の中国の学生運動の代表として、しばしば国際的にも活躍していた人物です。

ちょうど日本でいうと香山健一学習院大学教授が日本の全学連委員長であった時期です。国際学連がブラハに本部があった時に、中国の青年代表として出ていた。

彼は北京大学出身で、共産主義青年団のエリートとして、やがて中国の学生運動を担ったわけですが、その後、まったく行方がわからなくなっていた。

それが、最近復活して鄧小平、胡耀邦に次いで党中央書記ですから、非常に重要だといっている。つまり、いろいろな曲折はあったが、中国にとっては、出るべくして出てきたようなリーガーが、いまや中国の中心にいる。そういう人たちが中国に育ってくるということは、当然彼らの世界認識が、なんでもかんでも、ソ連と対立するということ、馬鹿の一つ覚えのように固定的に考えているのではないということです。

彼らが天下をとったのです。そうすると、毛沢東はいまや文書の上でも否定され、毛沢東の後継者も駄目になった。鄧小平が、まだ政治生命はこれからもあるんだといったのは、鄧小平はまだまだいまの中国の状況に満足していないからです。

三千九百万人の中国共産党員の約半分が文革時代の入党者です。これからまさに全中国をつくり変えようとしているのです。それを中国では中国版行政改革——一九八〇年が庚申の年ですから、それにならんで庚申改革といっていますが、これは日本の行革と比べも

のにならないほど徹底した、根こそぎのつくり変えをする。そして、やがては政府運動としてやっていこうとしている。

ですから今回の党大会で、華国鋒とか文革後の北京政変のカギを握った汪東興のようなリーダーたちを、華国鋒はナンバーワンから二百番以下に落とし、汪東興はナンバー四だったが、中央委員候補の末席というわけですから、上から数えろと三百四十六番目。ここまで落として名前だけ残しているということは、決して華国鋒、汪東興の抵抗ではなくて、逆に彼らをみせしめとしているのです。かつて毛沢東に同調した者は許さないぞという鄧小平の信念が、ここに出てくるわけです。

彭德懷の自伝がベストセラー 人民公社で毛沢東を諷めた人

これを今後鄧小平バージとして、行政改革として、あるいは政府運動としてやっていく。そこまでやっておかないと一片の党中央決議では不安だ、俺が死んだ後、ひっくり返るかもわからないということを経験しているのは鄧小平だ。

党中央だけ握っても、人民解放軍も不安の種ですから、人民解放軍を削減すると同時に、当然中ソ国境からの軍の引き離しにもかかってくる。従来のように軍が政治に発言を持たないよう、党官僚が軍を支配する体制を徐々につくりつつあるといっているでしょう。ですから何かあると中国の不安の種に、人民解放軍はどうだ、地方の土着軍人がどうだという見方がありますが、私はこれからはそういう見方はだんだん出来なくなってくると思う。

結局中国も、日本の幕末動乱期から明治維新の立憲体制の官僚的組織づくりの段階に入っているのは間違いない。こういう状況の中で毛沢東は否定された。従来毛沢東と劉・鄧実権派があり、劉少奇こそ正しいということになったわけですから、劉・鄧実権派との間

には周恩来系列というもう一つの調整役の系列があったのです。

そして、数年前までは中国へ行くと、いつも周總理をたたえる詩が朗読されていたように、中国の民衆のことを思ってくれた周總理は偉かったという声があった。ところが時代が変わってきた。あれほど中国に災難をもたらした文化大革命の時に、周恩来は何をしたか。確かに晩年には周恩来は毛沢東の非に気がつき、毛沢東体制下の非毛沢東化をやり始めたが、しかし少なくとも毛沢東にかけていたではないか。

かつて私は劉少奇が最後に公衆の面前に出た一九六六年十一月、孫文生誕百周年記念の時に、この目でその光景を見ておりますが、劉少奇は周恩来に「革命が大切であって、いかに功績があっても、毛沢東に背く者は末路がない」といわれた時に、顔面蒼白となった。その時、鄧小平は赤い語録をふっている周恩来をにらみつけて「いまに見ていろ」という物すごい顔つきをしていました。

結局、鄧小平の復讐が今日にいたっているわけですね。そして、いまの鄧小平にしても、胡耀邦にしても、毛沢東時代ならば絶対権力のとれなかった人です。ひよっとすると労働改造所か牢獄に入っている人なんです。

周恩来のイメージがかすんできたことはいうまでもない。したがって葉劍英や李先念にしても、周恩来系列の人の影響力がなくなってきた。そして、中国農村のシンボルであった人民公社もいまや解体過程に入っている。

恐らく今後これは、解体の方向に向かっていくでしょう。この人民公社などのような古い体質を引きずっていったら、中国の農村は一体どうなるか。

同じ湖南省出身の同郷の仲間として、彭徳懷は、毛沢東に徹底的に問責した。五九年の廬山会議で「人民公社大躍進なんてことをやったら、中国農村は破壊される。あなたは気でも狂ったか」と毛沢東

を諫めた。それで彭德懷は修正主義者、中国のフルシチョフとして失脚していったのです。

彭德懷は、農業でもっとソ連に学ぶべきだ、軍の近代化もソ連の方向を学ぶべきだといったリーダーでした。この彭德懷がいまや中国で非常に評価されています。毛沢東が全面的に否定されたのですから、当然といえましょう。

最近、彭德懷の自伝が、毛沢東選書を出した人民出版社から出版された。毛沢東選書は五巻までしか出していない。あとはどうなるか、出る見通しもない状況なのに、彭德懷自伝はいま中国でベストセラー。そして、この自伝には、天下分け目の決戦といわれる廬山会議の様子が詳しく出ているのみならず、彭德懷が毛沢東に宛てた手紙、党中央につきつけた意見書まで全部収録されている。中国でいま政治家の人気投票をやったら、彭德懷が一番票をとるのではないかと思う。

いままでは白眼視のロシア語 著しい親ソ派、知ソ派の登用

ですからソ連の関係でみると、フルシチョフ主義者、路線は、いまの中国では許容されることになっている。

毛沢東系列、周恩来系列、劉少奇系列、鄧小平系列、そして、彭德懷系列。ところがもう一つの発展がある。それは早い時期の瀋陽事件で、あまりご存知ないかもしれませんが、戦後のどさくさの四五年から中華人民共和国建設の時期、着々と東北（満州）で勢力を伸ばしたリーダーに高崗タカガキがいた。

彼は四九年の建国の時には、毛沢東、劉少奇、周恩来、そして高崗というような序列で天安門の樓上に上った中央人民政府の副主席でした。しかしながら、五四年に早くも旧満州に独立国をつくろうとして摘発され、五五年には獄中で自殺という発表が、人民日報に

載り、失墜していった。

毛沢東にいわせれば、これは中国共産党の建国後の最初の深刻な党内闘争であっただけでなく、中国共産党にとっては震度8の大地震であった。なぜであろうか。そこにはスターリンの後だてがあったのです。

スターリンはヤルタ体制といわれる下で、東欧諸国に人民民主主義の名で傀儡政権を作っていた。同じことをアジアでも考えないはずはなかった。そして金日成を北朝鮮に送り込み、南朝鮮の土着の指導者を肅正していく。それが今日の北朝鮮です。

高岡は、かつて毛沢東が長征の末、延安に根拠地を築くことが出来たのは高岡たちがそこを守っていたからで、中国革命の貢献には自信があった。自分は当然、国家の要職につけると思っていた。しかし、劉少奇が国家主席、周恩来が国民の総理。人事について不満を持ち、そこで東北を固めたわけで、そこに目をつけたのがスターリンです。

スターリンは、かねて中国建国後の中国共産党が、自分のいうままになるような政党であってほしいというところから、ハルビンに李立三という三〇年代の留ソ派（ソ連に留学した指導者）を送り込みます。一九七四年、つい最近モスクワで客死した王明という、これまで留ソ派の大物を用いようとするのですが、いずれも地元で支持がない。ところが高岡は東北では東北王といわれる基盤を築いていた。

そこで、全面的に高岡をバックアップすることによって、また高岡もそれに応じることによって、建国直前の四九年七月にはスターリンとの間に独自の通商貿易協定さえ結んでいる。北京の党中央とはまったく別個にですよ。

こころ、二年高岡グループに連座して一斉に失脚した当時の中国共産党東北局、あるいは東北人民政府の要人たちが、次々に復活し

てきている。

東北の心臓部、遼寧省の最高権力者は、中国共産党遼寧省委員会の第一書記郭峰。高崗の六人の側近の一人です。黒竜江省。これはアムール川とウスリー川を隔てて、ソ連と接しているところですね。省長に当たる黒竜江省全国人民代表大会常務委員会主任は趙徳尊。これらの人はこの間の第十二回党大会でも席を占めている。

つまり、よもやと思われていた親ソ派スターリン主義者であった人まで、今日の中国では復活してきている。

フルシチョフ主義者、高崗派が、そのままスターリン主義者とは思いませんが、一つの潮流がここまで変わってきているということは、非常に内在的なトレンドですから大いに重視しているのではないかと。

そう思つてふり返つてみると中ソ和解は、このところ出てきた問題ではなくて、まさに中国がアフガニスタン侵攻のあと、オリンピックをボイコットする覇権主義反対、日中平和友好条約万々歳といつていたこの時期から、この東北を最初にして、徐々にソ連に対する見方が変わってきています。今日、中国では憲法も改正し、覇権主義ということもいなくなつたし、ソ連を社会帝国主義というような評価もしなくなつた。

東北では、皆ロシア語世代です。いままではロシア語が出来るということで白眼視されていたので、皆、黙っていた。

進展はブレジネフの演説から 連帯の支援拒否にソ連は満足

東北だけでなく、中国共産党の中で、共産主義青年団出身者が、台頭している。この外務大臣になった呉学謙もそうです。同時にロシア語の出来る知ソ派の台頭が著しい。

この間、中ソ関係が大きく進展したのは昨年の三月のブレジネフ

中日懇話会



の呼びかけでした。あのブレジネフの演説を読んだ時に私は率直に
いって、これは大変な呼びかけであると感じた。これは実に中味の
ある演説だったですね。

こういうふうに呼びかければ、中国も答えざるを得ない。要する
に人の心をとらえるものがありました。言外に「鄧小平、よくぞや
ってくれた。憎むべき毛沢東を否定してくれた」という気持ちで
ているのです。

もう一つはポーランドの連帯問題です。

ポーランドの連帯を支援するか、しないかの問題は、社会主義の
国ではより根本的な問題だと思えます。こういう問題をつきつけ
られた時に、当然連帯はソ連とあれほど対立している中国ですから、
中国共産党に支援を求めましたが、中国共産党は却下した。

そして連帯つふしのヤルゼルスキ政権と通商協定を結んで今日に
いたっている。そしてポーランドのように西側諸国におだてられて
次々借款導入だ、技術協力だといってやったために、経済はめちゃ
くちやになったではないか。借金だらけになったではないか。その
挙句、社会がうまくいかなくなって連帯のような、まさに反革命分

子が出てきた、というのが中国共産党の公式の見解です。

これをソ連が知らないはずがなく、ポーランドの連帯を支援してくれなかったという、ソ連の満足感が出ているわけです。

中ソ国境の兵力引き離しについても、既にブレジネフの演説の中にはっきり出ているわけです。

既に東北辺りでは河川交渉、貿易交渉、鉄道連航交渉も七九年あたりから、進んでいたわけです。ですから、こういう問題をブレジネフにつきつけられた時に、中国側は黙っていないだろうと思ったり、案の定、中国では外務省のスポークスマンの銭其琛が留意する行動といったのは皆さんご承知のとおりです。

それだけでも異例ですが、このブレジネフの呼びかけの全文を全中国の幹部に通達した。新華社でその要約を公表したわけです。こういうことをやりすぎると、首が飛ぶわけですが、銭其琛は五月の改革で、外務次官に昇格しました。そしてこの九月には中央委員会に席を占めた。外務官僚が党中央に席をつらねるのはまれです。銭其琛は中国外務省きってのロシア通です。

昨年の夏、教科書問題でわが国の文部、外務両省の局長が、北京にかけつけ会ったのは肖向前さん。政治的影響力は殆どない人です。肖向前さんより遙かに影響力のあるソ連・東欧局長である于洪亮。彼はひそかにモスクワを訪れて次官会談の下準備をしていたのですね。つまり、教科書問題で、相手に取りつくしもないような状況であった時にですよ。これは象徴的な意義を持つと思う。

一回りも二回りも大きくなった形で、中国、ソ連、北朝鮮の前に立ちはだかっている列島。これは中国から見ると金ピカの列島です。中国にとっては、侵略が進出に変わろうが、何もいま始まったわけでない。叩くことが必要であったわけです。

そこで考えてみますと、私どもはこの十年間、日中友好という状況の中で、時間をかせいできた。いってみれば中ソ対立に安閑とし

ていることが出来た。

しかしながら、中ソ対立はまさに夫婦げんかのようなものですが隣の家に來て亭主の悪口を盛んにいう。だからといって、相手になると今度は向こうが怒り出すという性質のものであつて、もしも中国がポーランドの連帯を認めれば、そして一昨年アメリカのヘイグ長官の訪中の時に示されたように、アメリカが中国の武器体系をまるごとNATO側のものにするか。ゆくゆくは中国がミグの戦闘機をやめて、FXの飛行機を飛ばそうという時に、中国が応じてくれれば、それは完全に中ソは永遠に対立するとみていいでしょう。

だけど、そういうような踏み絵をつきつけられた時、中国は社会主義者としての第一線を踏み越えることが出来なかった。

先にいった赤い貴族の独裁体制が、そういうことを絶対に許容しないことを考えますと、この夫婦げんかは結局籍は抜けていなかったのです。それで相手がよりを戻そうとする時に、「何だあれは変心したのか」と追いかけてみても仕様がなない。

むしろわれわれは、同じ社会主義国である中ソが、同じ目的を持つのが当たり前だという認識の上で、今後の西側諸国なり、わが国のあり方をもう一度見直して、いよいよこれから本格的な競争が始まるかもしれない。その時に、私どもは何もあわてる必要はない。ただそういう中ソ関係が変動し得ることを折り込んでいないと、またレーガン政権などは、中ソ関係についてたかをくくっているだけに、もしも、これが本物ということになりますと、物すごく、日本に防衛力増強を要求することになりかねない。

そうであるだけにこの際、中ソの動きを冷静にみていく必要があるのではないかと思います。

最近、私は啓蒙的な本でカッパビジネスから『中ソ同盟の衝撃』という本を書いたばかりです。興味のある方は読んでいただければ幸いです。

目次

新段階の中ソ関係	2
東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄	
新会員	27
家康の結婚	27
この一手―囲碁実戦道場	30
大名古屋経済人伝 土川 元夫	32
芸能百話 代役物語	34
中日新聞の催し	36

●次回「中日懇話会」のお知らせ

◇と き 二月二十八日(月)午前十一時五十分―午後二時ごろ
◇と ころ ホテル・ナゴヤキャッパル二階「青雲の間」

芳徳講師 日本経営者団体連盟専務理事 松崎
演 題 「83春闘と日本経済」

松崎講師略歴 大正二年三月一日、福岡県小戸町に生まれる。昭和十三年東京大学法学部を卒業して厚生省入り。二十三年労働省労政局労働法規課長、三十二年中央労働委員会事務局長、一七年富士製紙、四十年東海製紙常務取締役、四十五年十一月日経連専務理事、中労委時代には王子製紙、三井三池大争議の調停に努めるなど労働問題のベテラン。「公共企業体労働関係法の解説」「労使関係の診断」など著書も多い。現住所は東京都世田谷区桜丘三二一九―九